

介護が変わる 地域が変わる

介護ビジョン

平成15年10月15日第三種郵便認可
毎月1回20日発行
平成29年12月20日発行 通巻175号

地域介護経営 1

2018
JAN.
No.175

地域特集 病院から自宅に直行・新宿区の激闘

介護と医療をつなげるカギは 「顔の見える関係」にあり

新春特別 座談会&対談 若手リーダーが徹底討論！

介護が与える
地域への
インパクトと
可能性



馬場拓也
社会福祉法人
愛川舜寿会



若野達也
奈良県若年性認知症
サポートセンター



秋本可愛
株式会社
Join for Kaigo



池本修悟
一般社団法人ユニバーサル
志縁センター



山崎 亮
株式会社studio - L



今月の

イノベーター

innovator 下河原 忠道

株式会社シルバークウッド代表取締役

認知症でも普通に暮らせる住まいをつくりたい！

Tadamichi Shimogawara

東京都と千葉県で10のサ高住と、二つのグループホームを展開する下河原忠道さんはもともと介護業界にいたわけではない。米国で薄板鋼板について学び、帰国後は独自の建築工法で建築費を安く抑える方法を開発し、2011年からサービス付き高齢者向け住宅の建築を始めた。「入居者には家にいたときと同じように自由に過ごしてもらいたい。地域住民としての生活を実感してもらいたい」と話し、「自らできることは自らでやる」ように入居者に促している。一方で、認知症の人への理解を深めようと、VRを使った認知症体験会も実施。そんな下河原さんにめざすサ高住とコミュニティの在り方を聞いた。



千葉県浦安市の銀木屋<浦安>の駄菓子屋には放課後、子どもたちが立ち寄り

地域住民は認知症の人から学ぶ

VRを通し 認知症への理解を促す

多くの施設は施設をし、利用者を敷地から外に出さないようにしています。うちはまったく逆の発想をとっています。認知症の人が外に出て行って、たとえ迷惑をかけたとしても、地域住民は初めて接する認知症の人から多くのものを学べるからです。

認知症でも、普通に生活できます。周りのサポートが得られれば、自立した生活を継続することも可能です。ストレスの少ない住環境であれば、穏やかに生活している認知症の人はいっぱいいます。

そこで、私は認知症を理解してもらうために、VRを通し、認知症の人たちが外の世界をどう感じているのか見えているのかを知ってもらおうプロジェクトを進めています。私が運営しているサ高住の銀木屋では、地域住民向けにVRの体験をしてもらっています。

地域住民は最初、認知症になりたくないという気持ちで来ます。でも、終わった後は認知症を怖がらなくてもいいと考えが変わってきます。

子どもたちが認知症高齢者と 自然体で交流

各銀木屋では祭りなどを通して、施設を地域に開放し、地域住民が認知症の人と接する機会を設けています。

施設内常設の駄菓子屋の店番も、認知症のおばあさんがやっています。買い物に来た子どもたちには、あえて「この人は認知症なんだ」ということは伝えていませんが、子どもたちは「ちょっと違うな」「このおばあちゃんは何かあるんだな」ということを感じます。会話が成り立たないなんてことが普通にあるわけですが、子どもたちは察知し、相手の尊厳を傷つけたり、差別をしない行動を取ってくれます。

銀木犀は地域の コミュニティの場

たとえば、100円で50円のお菓子を買ったら、お釣りが500円きたりする。そういうなかで子どもたちは何かを学んでいくと、僕は思っています。

認知症の人を、社会との関係を断絶させて施設の中に閉じ込めるのはご本人にとっても不幸ですが、子どもたちにとっても不幸です。認知症でも生活できることを知らずに大人になってしまう。認知症になったら終わりというイメージのまま、彼らが大人になってしまったら、僕らが認知症になったときに、彼らにすぐ施設に閉じ込められてしまいますよ。

子どもたちの たまり場となった駄菓子屋

銀木犀（浦安）では高齢者住宅として入居者を募集する前に、駄菓子屋を先にオープンしました。やがて、子どもたちが来るように

なり、口コミでその存在が広がっていききました。

しばらくの間は子どもたちだけが訪れていましたが、やがて入居者が入るようになりました。最初に子どもたちを見て、「ここは何ですか」と聞いてくる入居者の家族もいたほどです。今は地域住民が気軽に出入りし、異なる世代が自然に交流できる空間となっています。

さらには、入居していた高齢者が元気になり、自宅に帰っていくこともあります。規則正しい生活をしてコミュニケーションをとるうちに元気になっていくんです。

今、高齢者や若者、シングルマザー、外国人らが一緒に住めるサ高住を計画しています。高齢者住宅を突き詰めると、普通の賃貸住宅の形態に近づくと実感しています。そうした住まいづくりを続けます。



下河原 忠道 (しものがわら ただみち) 氏

1971年、千葉県浦安市生まれ。跡取り息子として、92年より父親の経営する鋼鉄会社に勤務。薄鋼を活用する「スチール・フレーミング工法」を米カリフォルニア州のオレンジ・コースト・カレッジで学ぶ。帰国後の2000年、株式会社シルバーウッドを設立。11年、千葉県鎌ヶ谷市で銀木犀の第一号を開業した。VRの技術を使って、認知症の人の世界を疑似体験する啓蒙活動にも取り組んでいる。

① VR認知症体験会でVR機器の取り付けを手伝う(2017年8月、横浜市で開催された第2回全国介護福祉総合フェスティバルにて) ② 銀木犀<浦安>は子どもたちの社交場だ ③ 入居者のポストの前で。入居者は自分で手紙や新聞を取りにポストまで出向く ④ 広いスペースを取った食堂は出入り自由。地域コミュニティの場ともなっている ⑤ 認知症体験会で熱く語る ⑥ 壁には猫とネズミ、それぞれのドアが。遊び心も大事にしている。